

日本大学

➔ NIHON UNIVERSITY

日本の未来を担う “自主創造型パーソン”の 育成を目指して 全学的な教学改革を推進

日本大学では、今、“自主創造型パーソン”の育成を目指し、全学的な教学改革と入試改革が推し進められている。高等教育の改革が本格的に議論されているなかで全14学部を擁する日本最大級の総合大学である日本大学はどのようなアプローチで未来を担う人材を育成するのか。他大学からも注目されるその取り組みを紹介しよう。

取材・文／伊藤敬太郎 撮影／広路和夫



全学的な教学改革を目指す 「N.グランドデザイン」

日本社会は大きなターニングポイントを迎え、中教審の答申などにおいても新たな価値の創造やイノベーションを実現できる人材の必要性が唱えられている。このような社会的要請を受け、高校・大学での教育のあり方に関しても抜本的な改革の議論が進んでおり、すでに各所で具体的な動きも始まっている。

その一つが日本大学が着手している全学的な教学改革と入試改革だ。法学部、理工学部、医学部、芸術学部などバラエティに富んだ全14学部（図1）を擁する同大学が、はたしてどのように「全

学的」改革を実現しようとしているのか。先行的事例として注目されているその取り組みの全容を見ていこう。

教学改革のベースとなっているのが、2011年に策定された「N.グランドデザイン」。この改革プランでは、2018年までに、全学共通初年次教育科目と全学共通教育プログラム（仮称）を14学部のすべてで実施することを目標としたロードマップが描かれている（図2）。

構想の全体像は図3のとおり。上記の全学共通初年次教育科目と全学共通教育プログラムを「日本大学版教育スタンダード」と位置づけ、これらを通して早い年次で日大生としての土台を醸成。そのうえで各学部の特色ある専門教育

に接続していくことによって“自主創造型パーソン”の育成を目指す。

ベーシックな人間力を身につけた “自主創造型パーソン”を育成

「私たちは、自主創造型パーソンを“卓越した創造力・判断力・コミュニケーション力を持つ人間性豊かな人材”と定義しています。本学では、これまでも社会の各分野でリーダーとなる人材を育成してきましたが、学部ごとの独自性・独立性が強く、教育面での取り組みも学部によってバラつきがあるという課題がありました。単科大学の集合体であってはならないとの思いから、この点を見直し、各学部の個

図1 日本大学の全14学部

● 法学部	● 生産工学部
● 文理学部	● 工学部
● 経済学部	● 医学部
● 商学部	● 歯学部
● 芸術学部	● 松戸歯学部
● 国際関係学部	● 生物資源科学部
● 理工学部	● 薬学部

学部は上記14学部85学科。このほか大学院20研究科、短期大学部5学科1専攻科、通信教育部を擁する

図2 「N.グランドデザイン」ロードマップ

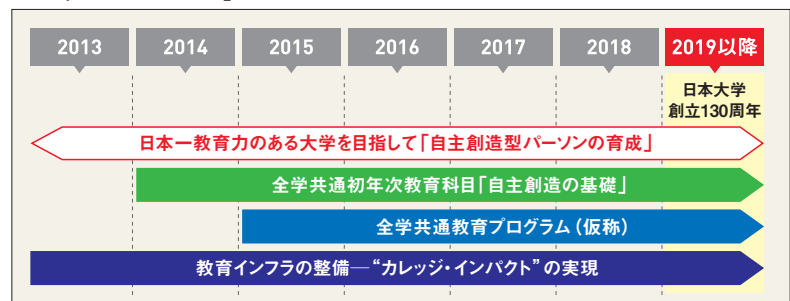
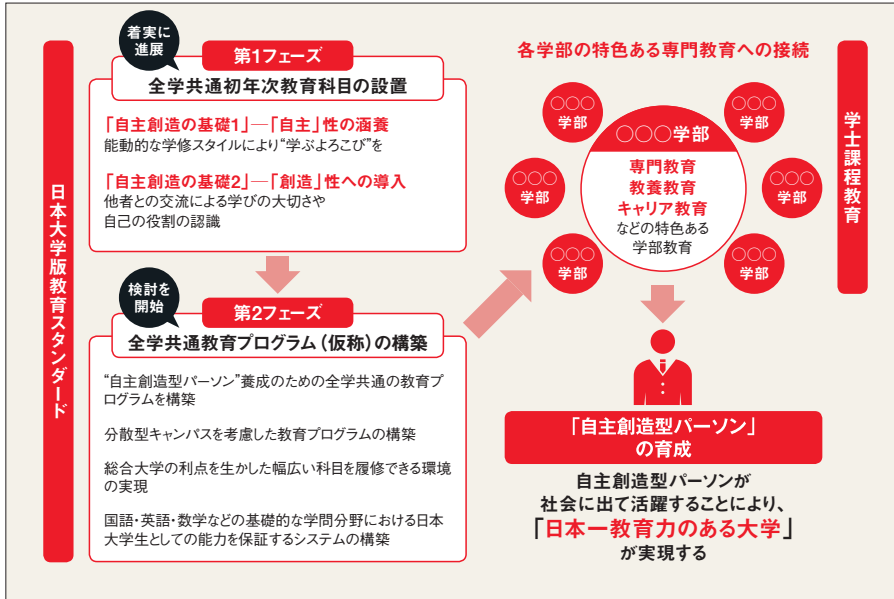


図3 「自主創造型パーソン」養成の取り組み



日本大学 本部
 学務部 教育推進課 課長
 並木洋明氏



日本大学 本部
 学務部 教育推進課 課長補佐
 大嶽龍一氏

性は生かしつつも、日本大学として核となる教育を提供していこうというのがこの改革のねらいです」（日本大学 本部 学務部 教育推進課 課長／並木洋明氏）

アクティブラーニングによる 全学共通初年次教育科目

一連の改革のなかでも同大学が最重要課題と位置づけているのが初年次教育だ。全面的にアクティブラーニングを採り入れた全学共通初年次教育科目「自主創造の基礎」は2014年4月から法学部、歯学部、松戸歯学部の3学部でスタート。来年度以降も順次実施学部を増やし、最終的に全学部への導入を目指す。「教員が一方向的にレクチャーするのではなく、学生が自ら参加することで、自主

性や創造性を喚起させることを目的とした科目です。1年次前学期（「自主創造の基礎1」）では、“大学で学ぶとはどういうことか”といったテーマに関してグループワークを重ね、大学での学び方を学修します。後学期（「自主創造の基礎2」）は、さらに踏み込んで、創造性やキャリア意識の醸成につながるテーマにしていく予定です」（日本大学 本部 学務部 教育推進課 課長補佐／大嶽龍一氏）

今年度は、先行する学部で実践を進めながら、教職協働で進めるWGを中心に「自主創造の基礎1」の教案を練り上げていく段階。来年度以降は、前学期に反転授業も採り入れる予定で、そのためのオンデマンド教材の作成も進められている。カリキュラムや授業内容に関しては、学部との丁寧な対話を重ねながら

年々ブラッシュアップしていきたいと大嶽氏はいう。

総合大学の強みを生かした 全学共通教育プログラム

自主創造型パーソン育成の第二の柱が全学共通教育プログラム（仮称）。現在、内容の検討が進められている。「学部を問わず全学生に共通して必要となる教養を養うことを目的としたプログラムです。リベラルアーツ、ベーシックスタディーズ、グローバルスタディーズ、コミュニケーション力創造の4つの科目群で展開していくことを構想しています。例えば、薬学部の教員による危険ドラッグについての授業など、多様な学部を擁する総合大学としての強みを生かした幅広い科目を設置し、学生の視野を広げていきたいですね」（大嶽氏）

日本大学は学部ごとにキャンパスが分散しているため、全学共通教育プログラムに関しては、メディア授業と対面授業を取り混ぜたブレンディッド・ラーニングを採



教員・職員・学生が授業改善に関して前向きに、かつ気軽に語り合う「日本大学 学生FD CHAmmit」。学部ごとの議論、学部・学科混合のグループによる議論を重ねて、自分たちが望む授業とは何かを考え、プレゼンテーションまでを行う。2013年度は160人を超えるメンバーが集まったが、2014年度は250人規模で開催予定

議論を通して思考を深める「自主創造の基礎」

第1学年後学期の科目として歯学部と松戸歯学部で先行して行われている「自主創造の基礎2」。授業は、両学部から集まった約80人の学生が10グループに分かれ、それぞれ異なるテーマ(右掲)を議論するアクティブラーニング形式。各グループに教員が1人ついていて、

「各教員が自分の専門に関連して、学生が関心を持ちやすいテーマを設定し



日本大学 歯学部
医療人間科学分野
中島一郎教授

ています。教員はあくまでファシリテーターで主役は学生。意見が出しやすい環境作りには努めますが、答えを誘導することはしません。結論以上に大切なのは、他人の意見も参考にしながら自分の考えを掘り下げていく思考のプロセス。ですから、振り返りが非常に重要になりますね(歯学部/中島一郎教授)

前学期の「自主創造の基礎1」でディスカッション形式の学び方について体験的に学んできたこともあり、後学期は学生の参加意識も高まっているという。学生からは「高校までの学びでは体験したことのない授業。新鮮な感覚が刺激になり、徐々に積極的に話せるようになってきました」との声も聞かれた。



【討論の課題例】

- 広告について考える
- 医療機器を科学する
- シャーロックホームズと殺しの英語学
- 地球温暖化と温室効果ガス
- クリスマスってどんな日
- イヌ派?ネコ派?あなたはどっち?
- 笑いを科学する
- 近代科学を生み出したものは何か?
- 長く泳ぐ方法を考える
- 理系に進む女性はなぜ少ないのか

用するなど、新しい学修方法の導入も検討。この仕組みを活用して、将来的には、付属高校の生徒や学外の一般人たちに授業を公開するプランもある。先行

図4 日本大学の入試改革

一般入試N方式の導入

基礎的な学力を測る日本大学統一入試

2011年度入試から始まった日本大学独自の統一入試。各学部共通の試験で学力を測る方式で、国語、地理歴史、公民、数学、理科、外国語の試験を用意し、学部・学科ごとに指定された科目を受験するシステム。いずれも高校までの学習で対応できる基礎的な内容となっている。1回の受験で複数学部・学科を併願することも可能。

<2015年度入試の実施学部・学科>

大学 法学部(第一部<昼間部>、第二部<夜間部>) / 商学部 / 国際関係学部 / 理工学部 / 生産工学部 / 工学部 / 歯学部 / 松戸歯学部 / 薬学部

短大 ビジネス教養学科 / 食物栄養学科 / 建築・生活デザイン学科 / ものづくり・サイエンス総合学科 / 生命・物質化学科

付属高校推薦入試の改革

高校における学習の理解度を評価

全国に23校ある付属高校からの推薦入学に関して、これまでは1回の試験で判定していたが、2011年度の付属高校の入学生からは新たに基礎学力到達度テストを導入。1年、2年、3年の春と秋の4回にわたり高校の学習の理解度を測る試験を課し、2年以降の試験結果を総合して希望学部・学科への合否を判定する制度に変更した。

する取り組みとして、JMOOCでの無料オンライン講座の公開も予定されている。

そして、一連の改革の実効性を高めるため、同大学が同時に力を入れているのがFD活動(ファカルティ・ディベロップメント=授業改善活動)だ。「自主創造の基礎」のスタートに先立ち、昨年12月には教職員によるワークショップ形式の全学共通初年次教育セミナーを開催。また、学生の意見を反映させるため、教員・職員・学生が参加する「日本大学学生FD CHAMmiT」を2013年度から立ち上げた。FD活動そのものが学生の自主性を養う機会にもなっているという。

学部(学科)併願可能な統一入試「N方式」を導入

入試改革の動きも見ておこう(図4)。大きな取り組みとして挙げられるのが、日本大学統一入試と位置づけられるN方式で、導入学部は今後も拡充する予定。付属高校推薦入試に関しても、1回の試験で判定する方式を廃止する。

「いずれも高校の通常のカリキュラムで身につけられる基礎学力を測ることに主眼を置いた改革です。学部ごとに実

施する入試では、どうしても学部の独自性を反映した試験内容になってしまいます。そういった方式ももちろん必要ですが、多様な学生を集めるには、それだけではなく、高校での学習を無理なく大学での学修につなげていくステップも必要。この入試改革によって、自主創造型パーソンを育成する一貫した流れを作っていきたいですね(並木氏)

「高大接続」も日本大学が取り組む改革の大きなテーマ

このように高大接続も日本大学が取り組む改革の大きなテーマの一つだ。この点は教学改革においても意識されており、ゆくゆくは前出の全学共通教育プログラムの一部を付属高校の生徒が履修できるようにする計画もある。

いよいよ実行フェーズの佳境に入りつつある日本大学の教学・入試改革。今後は全学共通教育プログラムを運営する機構の立ち上げなど、組織・インフラの整備も進めながら、さらに改革を加速させていくことになる。今の高校生が進学するころには、大きく変わった日本大学を体感できるはずだ。